

壇の越遺跡
早風遺跡 ほか

壇の越遺跡・早風遺跡ほか

平成二十二年三月

平成22年3月

宮城県教育委員会

壇 の 越 遺 跡
早 風 遺 跡 ほか

序 文

ゆとりや豊かさを目指すことが重要になってきたなかで、地域住民の間では身近な地域の個性豊かな風土や歴史的な文化財の保存・活用の取り組みへの気運が高まっています。

しかし、一方では道路建設や宅地造成など都市化の波が地方にも押し寄せ、高規格道路の建設や大規模な工業団地造成などの各種開発事業も年を追うごとに増加しております。文化財は年々破壊され、消滅の危機にさらされることが多くなっており、文化財は年々破壊され、消滅の危機にさらされることがあります。なかでも土地との結びつきの強い埋蔵文化財は、各種の開発により常に破壊される恐れがあることから、当教育委員会では開発部局等に遺跡の所在を周知徹底するとともに、開発との関わりが生じた場合には貴重な文化財を積極的に保護することに努めてきております。

本書は、開発関係機関などと十分な協議・調整を重ねたうえで調査することとなつたもののうち、平成 21 年度に当教育委員会が国庫補助金を得て、学術的に重要な遺跡について行った発掘調査の成果と、開発工事に先立つて確認調査を実施した遺跡の成果を収録したものです。こうした成果が広く県民の皆様や各地の研究者に活用され、地域の歴史解明の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、遺跡の保存に理解を示され、発掘調査に際しては多大なるご協力をいただいた関係機関の方々、さらに実際の調査にあたられた皆様に対し、厚く御礼申し上げる次第です。

平成 22 年 3 月

宮城県教育委員会

教育長 小林伸一

例　　言

1. 本書は、宮城県が平成21年度の国庫補助金を得て、宮城県教育庁文化財保護課が担当した公共事業等に係わる発掘調査報告書である。
2. 各遺跡の発掘調査から調査報告書に至る一連の作業は、遺跡の重要性から保存を前提とし、遺跡の性格や構成を把握することを目的として文化財保護課が行ったほか、調査原因となった開発行為に係わる機関の依頼を受けて文化財保護課が行ったものである。
3. 各遺跡の保存協議や発掘調査に当たっては、開発関係部局や地元教育委員会から多大な協力をいただいた。また、報告書作成に当たっては、次の方々からご指導、ご助言をいただいた（敬称略）。

石森館跡　　佐藤　洋（仙台市教育委員会）、千葉孝弥（多賀城市教育委員会）

市川橋遺跡　吉野　武（宮城県多賀城跡調査研究所）

4. 各遺跡の位置図は、国土交通省国土地理院発行の1/25,000の地形図を複製して使用した。
5. 各遺跡の測量座標値は、世界測地系に基づく平面直角座標第X系による。
6. 本書で使用した遺構略号は以下の通りである。

SA：塙跡・柱列跡 SB：掘立柱建物跡 SD：塙跡・溝跡 SX：道路跡、その他の遺構

7. 土色の記述にあたっては、『新版 標準土色帖 1994年版』（小山・竹原 1994）を用いている。
8. 塙の越遺跡・早風遺跡の図版1-1、および日の出山窯跡群の写真1で使用した空中写真は、「国土画像情報（オルソ化空中写真） 国土交通省」を一部加工して転載したものである。また、日の出山窯跡群写真2で使用した空中写真は、宮城県多賀城跡調査研究所が2008年に撮影したものをおもに加工して使用したものである。

9. 本書は、調査を担当した各調査員の協議を経て下記のものが執筆・編集した。

平成21年度発掘調査の概要　　天野　順陽

塙の越遺跡・早風遺跡、日の出山窯跡群、市川橋遺跡　初鹿野　博之

石森館跡　　久保井　裕之

10. 発掘調査の記録や出土遺物は、宮城県教育委員会が保管している。ただし、日の出山窯跡群の色麻町側については、色麻町教育委員会が保管している。

目　　次

平成21年度発掘調査の概要

塙の越遺跡・早風遺跡.....	1
日の出山窯跡群.....	15
石森館跡.....	19
市川橋遺跡.....	27
報告書抄録	

平成 21 年度発掘調査の概要

平成 21 年度県内遺跡緊急調査費の国庫補助金（総事業費 2,000 千円、補助率 1/2）による調査は、加美町壇の越遺跡・早風遺跡、色麻町日の出山窯跡群、登米市石森館跡について行った。以下、各遺跡の概要等を記述する。なお、最後に平成 20 年度に実施した多賀城市市川橋遺跡の調査成果も併せて報告する。

【壇の越遺跡・早風遺跡】

壇の越遺跡は、古代陸奥国賀美郡家跡と推定される国史跡東山官衙遺跡の南に広がる遺跡である。これまでの調査で、東山官衙遺跡の南前面には地方官衙では類例の少ない方格地割（東西約 1.1km、南北 0.8km 以上）が施工されており、東山官衙遺跡外郭南門から南に延びる南北大路とこれに直交する東西大路（南 5 道路）が基準になっていること、陸奥国府多賀城外に広がる街並みより古い 8 世紀中葉頃に東山官衙遺跡と一体に施工されたこと、8 世紀後葉から 9 世紀中葉頃には上位段丘の縁辺部に沿って築地塀や材木塀、門、櫓からなる大規模な区画施設がつくられ、東山官衙遺跡や街並みを区画内に取り込んでいることなどが明らかになっている。また、近年の調査で、東山官衙遺跡の南前面で材木塀と大溝による区画（南郭）を確認し、南郭の規模は東西約 215m、南北約 216m で、南北大路との交点に八脚門が開くこと、南 2 道路は南郭正面においては大路同様に幅広くつくれられていることなどが明らかになり、南郭は成立当初から南に広がる街並みとは異なる性格をもっていたとみられている。

早風遺跡は、東山官衙遺跡の北～東側丘陵上に位置する。これまでの発掘調査等で土塁跡や溝跡を確認しており、東山官衙遺跡の周囲を巡る外郭区画施設であることがわかっている。昨年度は 0 地点の発掘調査を実施し、丘陵東縁で 2 条の堀跡を確認したほか、溝に伴う土塁の存在も想定されるなど、東山官衙遺跡を囲む外郭区画施設東辺の様相が明らかとなっている。

今年度は、壇の越遺跡で 2 地点（133・134 区、135 区）、早風遺跡で 1 地点（p1・p2 区）の調査を実施した。

〔133・134 区〕南北大路西側溝の検出等を目的とした。両区で位置的に南北大路の西側溝と考えられる溝跡を確認し、南北大路は東山官衙遺跡が立地する丘陵裾部まで直線的に延びていることが明らかになったほか、西側溝の西方にはほとんど遺構がないことも確認した。

〔135 区〕南 2 道路以北の西 2 道路の有無を確認することを目的とした。痕跡的ではあるが、想定される位置で南北方向の溝跡を確認し、南 2 道路以北にも西 2 道路がつくられている可能性が高まった。

〔p1・p2 区〕東西大路（南 5 道路）の東側延長と東山官衙遺跡の周囲を巡る土塁跡の南側延長が交差する位置で、両者が直線的に延びているかなどを確認することを目的とした。p1 区で時期不明の掘立柱建物跡 1 棟と溝跡 2 条を確認したが、道路跡や土塁跡は発見できなかった。

【日の出山窯跡群】

色麻町の南東部に位置する多賀城創建期の窯跡群である。窯跡群は A～F 地点の範囲で捉えられ、このうち A・C・F 地点の一部について発掘調査が行われており、地下式窯窯跡 7 基が発見された A 地点が昭和 51 年に国史跡に指定されている。今回は溜池造成工事に伴い確認調査を実施した。計画

地はA地点の南東約400mの地点で、色麻町と大衡村の境界部分である。調査の結果、当初想定されていた古代の窯跡等の遺構は確認できなかったが、色麻町側の丘陵で近現代の炭窯跡とみられる窯跡の一部を確認した。

【石森館跡】

登米市の北西部に位置する館跡である。平成20年度に県道改良工事に伴い宮城県教育委員会が発掘調査を実施しているが、水濠部分については仮設水路を設置するなど別工事が伴うため、平成21年度に道路建設に併せて発掘調査を行うこととしていたものである。調査の結果、館に伴う水濠は、現在の水濠とはほぼ同位置に掘られていたことなどが明らかになった。

【市川橋遺跡】

多賀城市の西部、陸奥国府多賀城跡の南に位置する縄文時代から中近世の遺跡で、特に奈良・平安時代には碁盤の目状に区画された町並みが確認されており、集落跡や河川跡などから多量の遺物が出土している。平成21年3月に都市計画道路玉川岩切線の新市川橋建設に係わる砂押川左岸護岸工事に伴う確認調査を実施した。現代の河川に攪乱されたとみられ、古代の河川跡は確認できなかったが、現在の河床堆積物の下層から土師器、須恵器、瓦、石器などが出土した。



だん こし
壇 の 越 遺 跡

はや かぜ
早 風 遺 跡

調査要項

遺跡名：壇の越遺跡（宮城県遺跡地名表登載番号：30039 遺跡記号：P N）

早風遺跡（宮城県遺跡地名表登載番号：30036 遺跡記号：F O）

所在地：宮城県加美郡加美町鳥鳴、鳥屋ヶ崎地内

調査原因：重要遺跡範囲確認

調査主体：宮城県教育委員会

調査担当：宮城県教育庁文化財保護課

菊地逸夫 初鹿野博之

調査協力：加美町教育委員会 齊藤 篤

地権者 2 名、鳥鳴地区・鳥屋ヶ崎地区行政区長

調査期間：平成 21 年 11 月 2 日～11 月 19 日

調査対象面積：壇の越遺跡 約 1260m²、早風遺跡 約 310m²

調査面積：壇の越遺跡 170m² (133 区 : 63m² 134 区 : 19m² 135 区 : 88m²)

早風遺跡 75m² (p1 区 : 52m² p2 区 : 23m²)

I はじめに

1. 遺跡の概要

壇の越遺跡・早風遺跡は、宮城県加美郡加美町鳥嶋、鳥屋ヶ崎ほかに所在する。大崎平野の西端に位置し、奥羽山脈から分岐して南東に延びる標高60～110mの丘陵上に早風遺跡が、この丘陵の南を東流する鳴瀬川支流の田川によって形成された標高50～60mの河岸段丘上に壇の越遺跡が立地する。これらの遺跡は古代陸奥国賀美郡家跡と推定される国史跡・東山官衙遺跡に隣接し、前者はその北～東側、後者は南側に広がっている（第1図）。

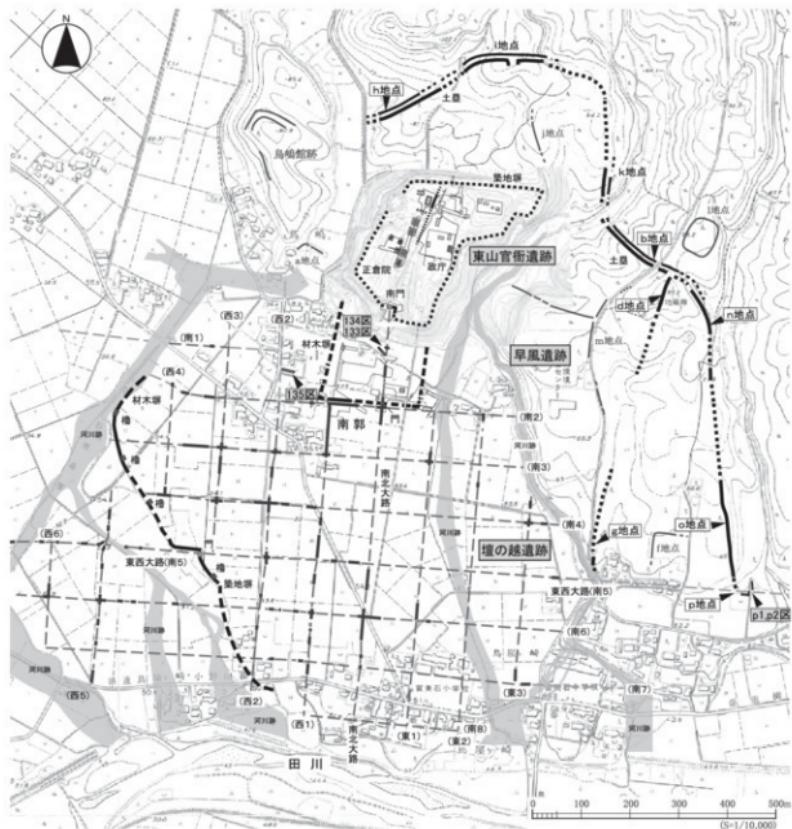
東山官衙遺跡は、壇の越遺跡の北に広がる丘陵の南端、標高約80mの台地上に立地しており、昭和61年度から平成9年度まで宮城県多賀城跡調査研究所（1～7次、宮多研 1987～1993）と加美町（旧宮崎町）教育委員会（8～12次、宮崎町教委 1996～1998）による発掘調査が実施された。その結果、



No.	遺跡名	立地	種別	時代	No.	遺跡名	立地	種別	時代
1	壇の越遺跡	丘陵	官衙・集落	縄文・弥生・古墳・奈良・平安・近世	13	尾形門山遺跡	丘陵	散布地	縄文・古代
2	早風遺跡	丘陵	官衙・集落	縄文・古墳・奈良・平安	14	埋だれ山遺跡	丘陵斜面	散布地	縄文・古代
3	国史跡 東山官衙遺跡	丘陵麓	官衙・城郭	古墳後・奈良・平安・中世	15	上の原下遺跡	丘陵斜面	散布地	縄文・弥生・古墳・奈良・平安
4	国史跡 城牛櫓跡	丘陵	官衙・集落・城郭	縄文・奈良・平安・中世	16	神沢上の原遺跡	丘陵斜面	散布地	縄文・弥生・古墳・古代
5	羽場遺跡	丘陵	散在地	縄文・弥生・古墳・奈良・平安	17	渡坂尾敷遺跡	丘陵斜面	散布地	縄文・弥生・古墳・奈良・平安
6	長木本遺跡	丘陵	散在地	古代	18	堤藏原遺跡	丘陵裏	散布地	縄文・弥生・古代
7	上原遺跡	丘陵	散在地	縄文・古代	19	米泉原山横穴墓群	丘陵斜面	横穴墓	古墳後・古代
8	長蛇寺鍵道遺跡	丘陵	散在地	縄文・弥生・古墳・奈良・平安	20	古屋敷遺跡	丘陵斜面	散布地	縄文・弥生・古代
9	天王芸葉遺跡	丘陵	散布地	縄文・弥生・古墳？・古代	21	吉古遺跡	丘陵	散布地	縄文・弥生・古墳？・古代
10	古船遺跡	丘陵	散布地	縄文・古墳・奈良・平安	22	柳沢遺跡	丘陵麓	散布地	古代
11	鳥谷ヶ森遺跡	丘陵	散布地	縄文・古代	23	町史跡～(?)塙古墳群	丘陵	円墳・散布地	古墳後・古代
12	土の山遺跡	丘陵斜面	散布地	古墳・奈良	24	田川八幡原遺跡	丘陵	城郭	小字

第1図 塙の越・早風遺跡と周辺の遺跡

(1) 台地縁辺の東西約 250 m、南北約 300 m の範囲を築地塀で区画し、台地南部を東西に二分する谷の入り口に当たる南辺中央には南門（八脚門）が設けられたこと、(2) 内部は、谷の北延長線上に位置する幅約 3 m、深さ約 1.4 m の南北大溝により東西に二分されたこと、(3) 大溝の東側は政府のはか、館院や厨院などが置かれ、政府は東西約 57 m、南北約 52 m の規模で、8世紀後半以降おおよそ 3 度の変遷が認められること、(4) 大溝の西側は倉庫院で、南半には倉庫群、北半には管理施設とみられる建物群があり、火災を受けた礎石倉庫からは多量の炭化米などが出土したこと、「館上」、「上厨」、「厨」といった官衙の施設名が記された墨書き土器が出土したこと、(5) 8世紀中葉に創建され 10世紀前葉まで存続したこと、などが判明した（第2図）。これらの結果から、遺跡が古代陸奥国賀美郡家



第2図 墓の越遺跡・早風遺跡と東山官街遺跡

- | | |
|------------|-----------|
| — 土壠路・堀跡 | — 土壠状高まり |
| — 道路跡(調査済) | — 道路跡(推定) |

133～135区、p1-p2区 今年度発掘調査

b-d-g-h-n-o地点 平成17・18・20年度発掘調査

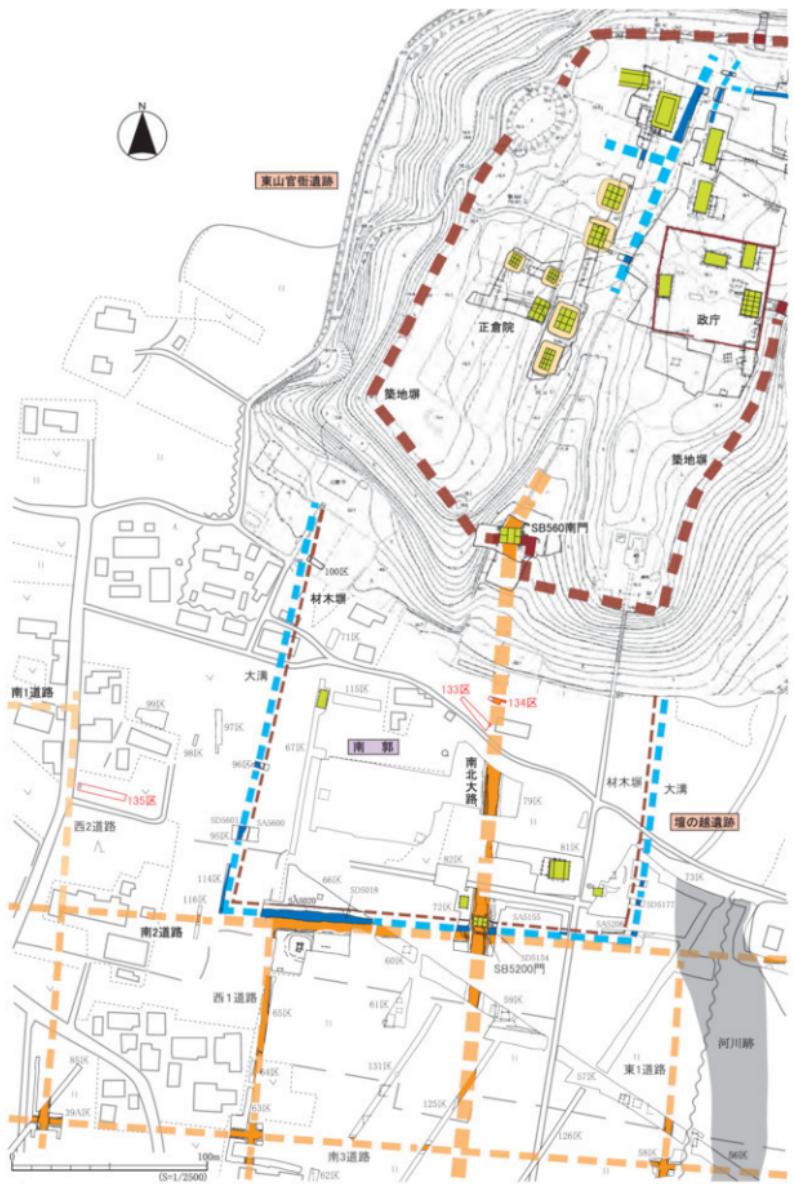
— 道路跡(未確認、要再調査)

跡と推定され、遺跡の規模が明瞭で、遺構の保存状況が良好なため、平成 11 年に国史跡に指定された。

壇の越遺跡は、東山官衙遺跡の南、比高約 20 m の河岸段丘上にあり、遺跡内の段丘面は比高約 2 m の北東側の上位段丘と南西側の下位段丘に大きく分けられる。県営は場整備事業や県道改良工事などに伴う発掘調査が平成 8 年度から毎年継続的に行われており、これまでの調査で、(1) 東山官衙遺跡の外郭南門から南に延びる南北大路とそれに直交する東西大路（南 5 道路）を基準とし、交差点中心間を 1 町とした地方官衙として類例が少ない方格地割が施工されたこと、(2) 方格地割で施工された道路のうち、南北大路、東西大路（南 5 道路）、南 2 道路が基幹的な役割を果たしたこと、(3) 方格地割は陸奥府域多賀城外より古い 8 世紀中葉に成立し、東山官衙創建と一体的に施工されたこと、(4) 変遷は 3 時期（I 期：8 世紀中葉～後半、IIa 期：8 世紀後葉～9 世紀中頃、IIb 期：9 世紀後半～10 世紀前葉）あり、なかでも IIa 期には、上位段丘の縁辺部に沿って築地堀や材木堀、門、櫓で構成される大規模な区画施設がつくられ、東山官衙遺跡を大きく取り囲むとともに街区を堀内部に取り込むこと、(5) 10 世紀前葉頃の東山官衙の廃絶とともに新たな居住施設はつくられなくなり、道路も維持されなくなったこと、などの成果が得られた（第 2 図、宮城県教委 2008、加美町教委 2008a・b など）。

また、近年の調査で、東山官衙遺跡南正面の南 2 道路北側に材木堀と幅約 3 m の大溝で構成される区画施設が存在することが明らかとなった（南郭、第 3 図、加美町教委 2008b、宮城県教委 2008）。区画施設がつくられたのは 8 世紀後葉（地割 IIa 期）で、9 世紀前半まで存続したと考えられる。その規模は南辺約 201 m、東辺が台地の傾斜変換点まで約 123 m、西辺が同じく約 207 m である。材木堀は地上高 3 m 前後と推定され（宮城県教委 2008）、その外側 2 ～ 3 m の位置に大溝が設けられる。材木堀と南北大路との交点には八脚門が設けられ、門の内側には門番詰所とみられる小型建物が伴う。南郭内部には南北大路以外の道路がつくられず、建物などの施設は散在する状況である。また、昨年度の調査で、南 2 道路は南郭に面する部分のみ、方格地割成立当初から広くつくられていたことが明らかとなった（宮城県教委 2009）。これらのことから、南郭は、区画施設の有無の違いはあるが、地割 I 期の段階から南の街区とは異なる空間だったと考えられる。

早風遺跡は、東山官衙遺跡の北～東側丘陵上に位置し、地元の研究者である板垣剛夫氏の綿密な踏査によって通称「女貝堀」といわれる空堀状遺構と土星が存在することが確認されていた（板垣 1973）。平成 15 年度に、宮城県教育委員会と加美町教育委員会はこの丘陵上の踏査を行い、14 地点において“土星状の高まり”や“堀状のくぼみ”を確認した（宮城県教委 2004）。平成 17 年度には、これらを対象とした発掘調査を実施し、東山官衙遺跡の周縁を巡る外郭区画施設であることが判明した（宮城県教委 2006）。この調査結果を受けて、周辺の地形なども考慮し、すでに周知されていた早風遺跡の範囲を大きく拡大することになった（第 1 図）。この区画施設を対象とした発掘調査は平成 18 年と 20 年にも行われ、これらの調査の結果、(1) 東山官衙遺跡の北～東側丘陵上を巡る外郭区画施設は土星と堀で構成され、総長約 1.7 km になること、(2) 土星・堀はそれぞれ 1 つの地点と 2 つの地点があり、区画の重要性や地形に応じてその構成を変えていたこと、(3) 外郭区画施設の内部は d 地点・g 地点などに見られる土星・堀で細分されていること、(4) これらの外郭区画施設は 8 世紀後半頃にはすでに存在した可能性があり、壇の越遺跡 IIa 期の上位段丘縁辺部に沿う築地堀・材木堀



第3図 調査区の位置と周辺の主要遺構

等と一体となって、東山官衙遺跡の周囲を東西 1.2km、南北 1.4km 以上にわたって取り囲む一連の外郭区画施設であったと考えられること、などが判明した（第 2 図、宮城県教委 2007・2009）。区画施設内部の区域では、東山官衙遺跡と沢を挟んだ東側丘陵で昭和 54 年度に発掘調査が行われ、竪穴住居跡や桁行 3 間以下の小型建物跡などが検出されている（宮崎町教委 1980）。竪穴住居が主体でこれに少数の小型建物が伴う施設構成は、壇の越遺跡における街区の中でも縁辺部のあり方に類似する。

以上のように、東山官衙遺跡の周辺に位置する遺跡群のこれまでの発掘調査で、官衙の南面には方格地割が施工された街区、北面や東面には竪穴住居や小型建物で構成される居住域があり、これらを堀や土塁等からなる区画施設が大きく取り囲む状況が判明した。なお、これらの背景となる歴史的環境については、昨年度報告書第 I 章－2（宮城県教委 2009）を参照していただきたい。

今後の主な課題としては、（1）壇の越遺跡の南郭内部北側、東山官衙遺跡に近い部分の道路・建物跡の様相を把握すること、（2）南郭区画施設の材木塀が、東山官衙遺跡の台地周縁をめぐる築地塀へどのように接続するか解明すること、（3）南郭外西側における道路跡（西 2・南 1 など）の有無を確かめること、（4）壇の越遺跡の東西大路（南 5 道路）の東側延長を早風遺跡で確認すること、（5）早風遺跡から壇の越遺跡に至る外郭区画施設の南辺、南東部、および北西部の位置と構造を明らかにすること、（6）門や櫓といった土塁に伴う施設の位置と構造を確認すること、などが挙げられる。

2. 調査の目的と方法

課題を元に検討した結果、今回の確認調査では以下の目的で 3 地点の調査を行うことになった。

(A) 南郭内の南北大路について、これまで南郭南半部（72.79.81 区、第 3 図）で調査されているが、北半部での様相を明らかにし、合わせて周辺の関連遺構を確認する。そのために、東山官衙遺跡の丘陵の南正面にある地点（対象面積約 925m²）に、133 区（63m²）と 134 区（19m²）を設定した。

(B) 西 2 道路について、これまで南 3 道路との交差点付近（39 A .85 区、第 3 図）まで確認されていて、南 2 道路以北で有無を確かめる。そのために、西 2 道路の推定線上で、南 3 道路との交差点より約 170 m 北の地点（対象面積約 335m²）に 135 区（88m²）を設定した。

(C) 壇の越遺跡の東西大路（南 5 道路）の東側延長、並びに昨年度確認された早風遺跡の外郭区画施設東辺（第 2 図 o 地点）の南側延長を、両者の推定接続部分（= p 地点とする）付近で確認する。p 地点は o 地点の約 150 m 南で、丘陵から段丘面への変換点付近に位置する。また、壇の越遺跡で東西大路が確認された最も東側の地点（51 区）より、約 370 m 東側にあたる。この周辺で調査可能な区域（対象面積 310m²）に p1 区（52m²）と p2 区（23m²）を設定した。

調査は 11 月 4 日に開始した。両遺跡とともに重機により表土を除去して遺構を検出し、一部の遺構は断ち割りなど精査を行った。平面図のみ電子平板を用いて作成し、断面図は 1/20 で作成した。平面図作成に使用した測量原点の座標値（世界測地系第 X 系）は以下の通りである。

壇の越遺跡：X = -155709.750 Y = -2835.906 早風遺跡：X = -156213.821 Y = -2396.084

写真撮影による記録は 35mm 一眼レフデジタルカメラ（1,000 万画素）および 6 × 7cm 判モノクロフィルムとカラーフィルムを用いた。

II 発掘調査

1. 塙の越遺跡の調査

(1) 基本層序

塙の越遺跡 133 区・134 区では以下のような基本層序が確認された（第 4 図）。

Ia 層：表土・畑耕作土。にぶい黄褐色のシルトで、厚さ 10～30cm。

Ib 層：旧耕作土やそれに伴う水路の堆積土。灰黄褐色のシルトで、厚さ 10～50cm。

II 層：黄褐色砂で、黒色粘土を縞状に含む。134 区のみ見られ、厚さ 10～40cm。水流により下層を削りながら堆積している。

III 層：黒褐色シルトで、砂ブロックをやや多く含む。厚さ 10～40cm。

IV 層：黒色粘土で、砂ブロックを少量含む。厚さ 10～30cm。

V 層：にぶい黄橙色砂。厚さ 10～20cm。

VI 層：明黄褐色粘土。133 区遺構壁面で確認され、厚さ約 20cm。

VII 層：黄橙色粘土質シルト、硬くしまる。133 区遺構壁面で確認され、厚さ 20cm 以上。

(2) 133 区の検出遺構と遺物

全体を V 層上面まで下げたところ、溝跡 4 条（SD5900～5903）が検出された（第 4 図）。遺構出土の遺物はないが、表土から非口クロ調整の土師器の球胴甕（第 6 図 1）、須恵器壺の小破片が出土した。

【SD 5900 溝跡】調査区東端で溝跡の西辺のみ検出した。検出長約 1.0 m、上幅 1.1 m 以上、深さ約 0.5 m である。調査区北東壁面から、掘り込み面は IV 層上面と確認された。すべて自然堆積土で、流水による砂の堆積（3 層）が顕著である。度重なる流水によって比較的軟らかい地山の IV～VI 層は削られ、溝の断面形が段状になったと考えられる。また、溝から溢れ出した堆積層（1 層）が、調査区東端に幅約 2 m にわたって認められる。

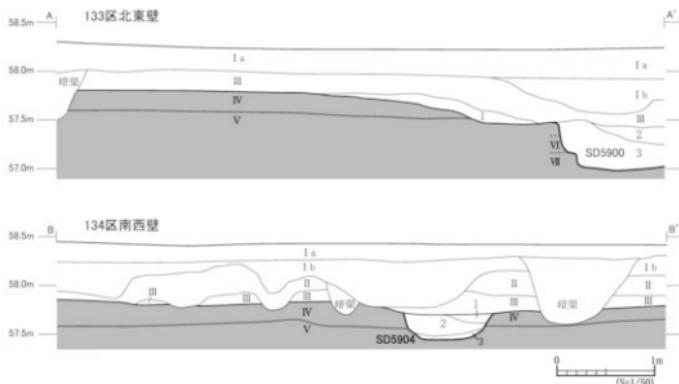
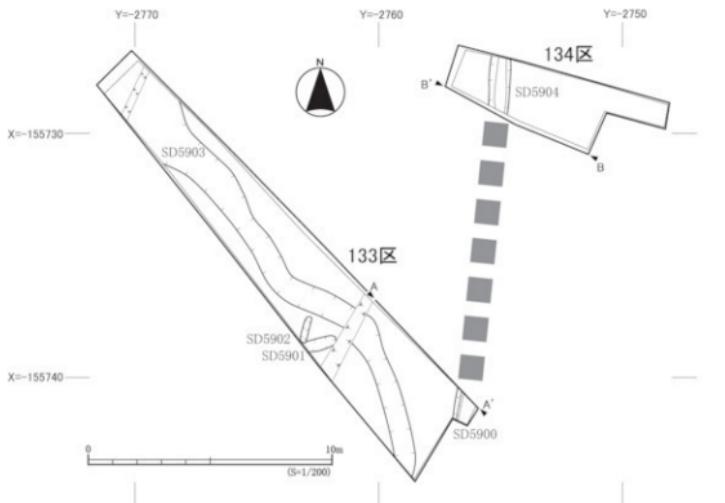
【SD 5901 溝跡】調査区中央南西壁付近で検出された東西方向の小規模な溝跡である。SD 5902 溝跡と重複し、これより古い。検出長約 1.3 m、上幅約 0.5 m で、西側は調査区外へ続いている。掘り込み面は IV 層上面で、V 層由来の砂ブロックをやや多く含む黒色粘土で埋め戻されている。

【SD 5902 溝跡】調査区中央南西壁付近で検出された南北方向の小規模な溝跡で、SD 5901 と重複し、これより新しい。長さ約 1.1 m、上幅約 0.3 m である。掘り込み面は IV 層上面で、V 層由来の砂ブロックを少量含む黒色粘土で埋め戻されている。

【SD 5903 溝跡】調査区に沿って北西～南東方向に蛇行する溝跡である。検出長約 20.0 m、上幅 0.9～1.3 m だが、北西側は調査区幅（約 2.0 m）よりも広がり、調査区壁面で IV 層に覆われているのが確認された。蛇行する平面形や、砂を主体とする堆積土であることから、自然の流路跡の可能性が高い。

(3) 134 区の検出遺構と遺物

133 区の調査結果を受けて、SD 5900 溝跡の延長を検出するために 134 区の調査を行った。IV 層上面（壁際は排水のため V 層上面）まで掘り下げたところ溝跡 1 条（SD 5904）が検出された（第 4 図）。これ以外の遺構は確認されず、遺物は搅乱から須恵器甕の小片が出土したのみであった。



SD5900 溝跡

層	土色・土性	特徴
1	褐色 (10YR4/1) 砂質シルト	小礫多く含む。V弱由来の砂を層状に含む。水流によって漂れ出した堆積
2	黒褐色 (10YR3/1) 粘土質シルト	小礫・砂を少量含む
3	灰黃褐色 (10YR4/2) 砂	灰色粘土を層状に含む。水流によってV・V弱層を削りながら堆積

SD5904 溝跡

層	土色・土性	特徴
1	黒褐色 (10YR2/2) 砂質シルト	黑色粘土ブロックを少量含む
2	暗褐色 (10YR3/2) 砂	黑色粘土を層状に含む。水流による堆積。SD5900の3層と同一か
3	黒色 (10YR2/1) 粘土	泥炭性の堆積

第4図 133区・134区の検出遺構(平面図:1/200、断面図:1/50)

【SD5904溝跡】調査区西側で検出された南北方向の溝跡で、検出長約2.2m、上幅約0.9m、下幅約0.5m、深さ約0.3mである。掘り込み面はIV層で、溝の断面形は逆台形状を呈する。すべて自然堆積土で、底面付近に湿地性の堆積と見られる黒色粘土（3層）が薄く堆積しているが、その後はSD5900と同様に、流水による砂の堆積（2層）が顕著である。このような特徴や溝の位置関係から、133区のSD5900溝跡と一連のものと考えられ、合わせて検出長は約15.0mになる。

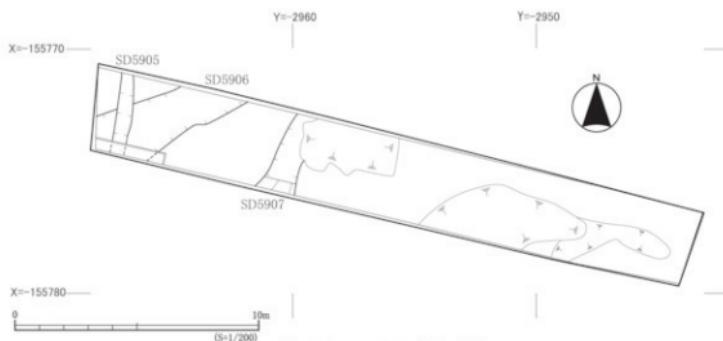
（4）135区の検出遺構と遺物

表土・盛土を除去したところ深さ0.3～0.5mで黄褐色粘土または砂の地山（133区のVI層に対応か）に達し、全体的に大きく後世の削平を受けている状況であったが、3条の溝跡（SD5905～5907）が検出された（第5図）。遺物は攪乱から須恵器环（第6図2）、縄文土器小破片が出土した。

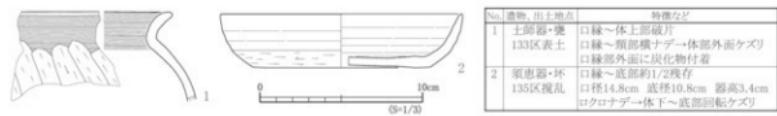
【SD5905溝跡】調査区西端で検出された南北方向の溝跡で、検出長約2.5m、上幅0.3～0.5mである。SD5906溝跡と重複し、これよりも新しい。調査区南壁で確認したところ、深さは10cm未満で、黒褐色土が薄く堆積していたのみであった。

【SD5906溝跡】調査区西端で検出された北東～南西方向の溝跡で、検出長約5.2m、上幅1.6～2.3mである。SD5905溝跡と重複し、これよりも古い。調査区南壁で確認したところ、深さは10cm未満で、疊混じりの砂が薄く堆積している。自然の流路跡の可能性が高い。

【SD5907溝跡】調査区西寄りで検出された南北方向の溝跡で、検出長約3.1m、上幅1.1m～1.6mである。調査区南壁で確認したところ、深さ約0.3m、断面形は不整形で、砂を主体とした堆積土であることから、自然の流路跡の可能性が高い。



第5図 135区の検出遺構



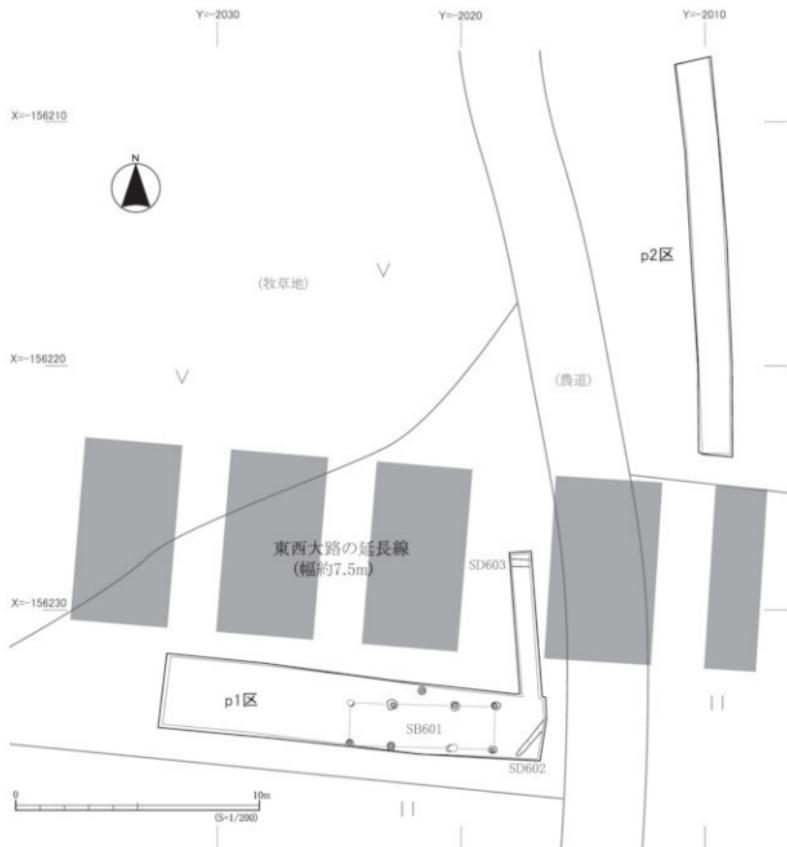
第6図 133区・135区出土遺物

2. 早風遺跡（p 地点）の調査

(1) p1 区

深さ 0.2 ~ 0.4 m で黄褐色砂の地山に達し、掘立柱建物跡 1 棟（SB601）と、溝跡 2 条（SD602・603）が検出された（第 7 図）。調査区断面を観察したところ、表土と地山の間に旧表土と見られる黒色シルトが薄く堆積しており、遺構はこの層を掘り込んでいることが確認された。遺物は表土から縄文時代の石器剥片が出土したのみである。

【SB601 掘立柱建物跡】桁行 3 間 × 梁行 1 間の東西棟建物跡である。柱間寸法は、桁行が東から約 1.7m、2.5m、1.7m、梁行が約 1.8m である。柱穴 8 個のうち 2 個は柱を抜き取った痕跡、6 個は柱痕跡が見られる。掘り方は直径 20 ~ 40cm の円形または不整形で、埋土は地山ブロックを多く含む黒色シルトで



第 7 図 早風遺跡 p 地点の検出遺構

ある。柱痕跡は直径 10 ~ 15cm の円形である。

【SD 602 溝跡】北東 - 南西方向の小規模な溝跡である。検出長約 1.8 m、上幅 0.2 ~ 0.3 m である。地山ブロックをわずかに含む黒色シルトで埋め戻されている。

【SD 603 溝跡】東西方向の小規模な溝跡である。検出長約 0.8 m、上幅 0.3 ~ 0.4 m である。地山ブロックを少量含む黒色シルトで埋め戻されている。

(2) p2 区

表土直下 0.2 ~ 0.3 m で地山に達し、遺構・遺物とともに検出されなかった。

III まとめ

1. 壇の越遺跡

(1) 南北大路

133 区の SD 5900 溝跡と 134 区の SD 5904 溝跡は同一の溝跡で、位置的に南北大路の西側溝と考えられる。この地点は、東山官衙遺跡の台地南部を東西に二分する大きな谷の出口にあたっており、掘り込み面（IV 層）は湿地だったと考えられるが、このような悪条件でも側溝を有する道路がつくられたことが明らかとなった。ただし、南側の 79 区で調査された南北大路には、西側溝に 3 度の掘り直しが確認されているが（加美町教委 2008c）、今回調査した地点では掘り直しが確認されなかった。また、溝跡の堆積土やその上層には流水による砂の堆積が顕著に認められたため、この地点では道路側溝が長期間機能したとは考えにくい状況であった。

その他の遺構について、133 区の SD 5901 や SD 5902 溝跡は、掘り込み面が IV 層であることから古代の可能性があるが、性格は不明である。SD 5903 は IV 層に覆われるため、古代より古い流路跡と考えられる。よって、従来の調査成果と同様に、南郭内は遺構が希薄であることが確認された。また、134 区では SD 5904 溝跡の中心から約 7.0 m 東側まで調査したが、東側溝は検出されなかった。

(2) 西 2 道路

135 区の SD 5905 溝跡は、位置や方向（座標北よりやや東へ振れる）から、西 2 道路の東側溝の可能性がある。西 2 道路より北に西 2 道路が伸びることが確認されれば、これまで未確認だった「南 1 西 2 交差点」やそれらに開まれた「西 2 南 3 区」の存在がほぼ証明される。ただし、今回の調査結果では残存状況が悪く、断定はできなかった。

2. 早風遺跡

p1 区で検出された遺構は、いずれも層位・遺物などの情報が乏しく時期不明である。SD 603 は東西方向の溝跡だが、位置や規模、並行する溝跡が検出されないことから、東西大路の道路側溝とは認めがたい。よって、今回調査した範囲では東西大路・外郭区画施設とともに確認されなかった。

○ 地点から伸びる外郭区画施設の延長線は、今回の調査対象区域よりも西側を通るため、位置的に

確認できなかったと考えられる。東西大路の延長は、壇の越遺跡の東端（51区、加美町教委 2008b）から同じ幅（約7.5 m）では直線的に延びていたとすれば、どちらかの調査区を通ると推定されたが、結果的には検出されなかった。これについては、調査地点がどの程度削平を受けているかが問題となるが、p1区に旧表土と考えられる黒色土が薄く残っていることと、なだらかに傾斜する地形であることから、後世に大きな改変を受けているとは考えにくい。可能性として、東西大路の方向が多少南北に振れていた、あるいは遺跡の端部なので側溝を有しない道路だったということも考えられる。いずれにせよ、今回の限られた調査区だけでは東西大路の有無は断定できないため、今後の周辺の調査成果を待って判断したい。

【引用・参考文献】

- 板垣剛夫 1973 「郷土の律令支配とその文化 第二章 奈良時代 第三篇 古代」『宮崎町史』pp.140–160
- 加美町教育委員会 2004 「壇の越遺跡V～VII」加美町文化財調査報告書第1～3集
- 加美町教育委員会 2005 「壇の越遺跡Ⅷ・Ⅸ」加美町文化財調査報告書第5・6集
- 加美町教育委員会 2005 「東山遺跡Ⅷ」—第8・9次発掘調査報告書— 加美町文化財調査報告書第7集
- 加美町教育委員会 2006・2007 「壇の越遺跡X～XII」加美町文化財調査報告書第8～10集
- 加美町教育委員会 2008a 「壇の越遺跡Ⅹ」加美町文化財調査報告書第13集
- 加美町教育委員会 2008b 「壇の越遺跡Ⅺ」加美町文化財調査報告書第14集
- 加美町教育委員会 2008c 「壇の越遺跡Ⅻ」加美町文化財調査報告書第15集
- 加美町教育委員会 2009 「壇の越遺跡Ⅼ・Ⅽ」加美町文化財調査報告書第16・17集
- 宮城県教育委員会 1997 「壇の越遺跡ほか」「舟場遺跡ほか」宮城県文化財調査報告書第173集
- 宮城県教育委員会 1998 「壇の越遺跡」「壇の越遺跡・念南寺古墳」宮城県文化財調査報告書第177集
- 宮城県教育委員会 2003～2005 「壇の越遺跡」「壇の越遺跡ほか」宮城県文化財調査報告書第195・199・202集
- 宮城県教育委員会 2006 「東山官衙遺跡周辺地区」「東山官衙遺跡周辺地区ほか」宮城県文化財調査報告書第208集
- 宮城県教育委員会 2007 「早風遺跡」「早風遺跡ほか」宮城県文化財調査報告書第213集
- 宮城県教育委員会 2008 「壇の越遺跡」「壇の越遺跡ほか」宮城県文化財調査報告書第217集
- 宮城県教育委員会 2009 「壇の越遺跡」「早風遺跡」「壇の越遺跡」「早風遺跡ほか」宮城県文化財調査報告書第221集
- 宮城県多賀城跡調査研究所 1987～1993 「東山遺跡I～VI」多賀城関連遺跡発掘調査報告書第3冊、第12～17冊
- 宮崎町教育委員会 1980 「早風遺跡発掘調査報告書」宮崎町文化財調査報告書第3集
- 宮崎町教育委員会 1996～1998 「東山遺跡X～ XII」宮崎町文化財調査報告書第7～9集
- 宮崎町教育委員会 1999 「壇の越遺跡II・III」宮崎町文化財調査報告書第10・11集
- 宮崎町教育委員会 2003 「壇の越遺跡IV」宮崎町文化財調査報告書第13集



1. 壇の越遺跡・早風遺跡・東山官衙遺跡周辺の空中写真（上が北）
国土交通省：国土地理情報（オルソ化空中写真）
縮尺：約1/15,000



2. 壇の越遺跡 133区（南東から）



3. 壇の越遺跡 134区（北西から）

写真図版1



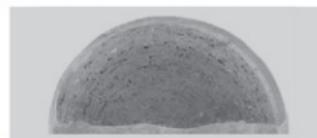
4. 塙の越遺跡133区 SD5900溝跡(南から)



5. 塙の越遺跡134区 SD5904溝跡断面(北から)



6. 塙の越遺跡 135区(西から)



7. 塙の越遺跡135区出土 須恵器壺(第6図2)



8. 早風遺跡 p1区東西トレーナー(東から)



9. 早風遺跡 p2区(南東から)

写真図版2

ひ　　で　やま　かま　あと　ぐん 日　の　出　山　窯　跡　群

調　査　要　項

遺　跡　名：日の出山窯跡群（宮城県遺跡地名表登載番号：31003）

所　在　地：宮城県加美郡色麻町四竈字馬古沢・黒川郡大衡村駒場字上蕨崎

調査原因：馬古沢溜池造成工事に伴う確認調査

調査主体：色麻町教育委員会・大衡村教育委員会

調査協力：宮城県教育委員会・宮城県農村整備課・宮城県王城寺原補償工事事務所

調査担当：宮城県教育庁文化財保護課

菊地逸夫　西村力　初鹿野博之　古田和誠

色麻町社会教育課

大河原基典

調査期間：平成 21 年 6 月 1 日～6 月 9 日（大衡村側）、6 月 8 日～12 日（色麻町側）

調査対象面積：約 25000m²

調査面積：約 1550m²（大衡村側約 1060m²・色麻町側約 490m²）

1. 遺跡の概要

日の出山窯跡群は宮城県加美郡色麻町四竈字東原ほかに所在し、町の中心部から南東に約4kmの丘陵上に立地する。南東に約30km離れた陸奥国府多賀城の創建期の瓦を生産した遺跡として知られている。遺跡の規模は東西約1.5km、南北約1kmで、窯跡群は現在A～Fの6地点で捉えられている(第1図)。これまでにA・C・F地点の発掘調査で合計24基の地下式窯跡などが発見され(宮城県教委1970・色麻町教委1993・宮多研2009など)、A地点は昭和57年に国史跡に指定されている。



第1図 調査地点と周辺の遺跡



第2図 トレンチ配置図

本窯跡群で生産された瓦や須恵器は、多賀城以外にも加美町城生柵跡・菜切谷廃寺、色麻町色麻古墳群など、奈良時代前半の県北地域の官衙・寺院・墳墓などから出土している。なお、本窯跡群の南側約1kmにある丘陵には、8世紀後半と推定される吹付窯跡・横前窯跡などが分布する（村田1988）。

2. 調査の方法

今回の調査は、水源確保のための溜池新設計画に伴う確認調査である。調査地点は、国史跡A地点の南東側約400mにある丘陵南斜面（色麻町）、および大きな沢を挟んだ丘陵北斜面（大衡村）で、日の出山窯跡群の遺跡範囲の南東端および隣接地にあたる。これまで窯跡などの分布は知られていない地点であるが、南側の丘陵には吹付窯跡なども分布することから、古代の遺構の存在が予想された。

調査は大衡村側を県文化財保護課、色麻町側を色麻町社会教育課が担当し、大衡村の調査が終了した6月9日以降は、色麻町の調査に県文化財保護課が協力した。調査対象は取り付け道路・堤体建設部分と水没範囲だが、地形的に窯跡や住居跡の分布が想定される道路・堤体部分を中心tronch（大衡村T1～23、色麻町T24～35、第2図）を設定し、遺構・遺物の有無を確認しながら掘り下げた。

3. 調査の成果

土層の堆積状況は地点により多少異なるが、大衡村側・色麻町側ともにおおよそ以下の層が認められる。I：表土 II：黒色土 III：褐色ローム IV：礫を多く含む黄褐色ローム V：灰色粘土

I～III層までは各層とも厚さ10～20cm程度である。tronch内には所々に沢や倒木痕による自然の窪地があり、間層として黒色土などの堆積が見られる。特に、III層とII層の間に灰白色火山灰の堆積が認められたため、III層上面が古代の地表面である可能性が高い。

すべてのtronchを基本的にIV層またはV層上面まで掘り下げたところ、T24で近現代の炭窯跡が確認されたが、古代の窯跡などの遺構は検出されなかった。遺物はT24の表土から縄文土器小破片が1点出土したが、文様は縄文のみで器面が磨耗しているため、詳細時期は不明である。なお、低地部分は軟弱地盤であったため調査を行わなかったが、丘陵部の結果から遺構はない判断した。

◎近現代の炭窯跡について

色麻町側T24で検出された炭窯跡（第3図）は、検出面から土管・堆積土下部から針金が出土したため、近現代の炭窯跡と判断した。埋蔵文化財としては扱われないが、残存状況が良好なため参考資料として提示する。なお、同様の窯跡は大衡村梅木遺跡などでも報告されている（大衡村教委1998）。

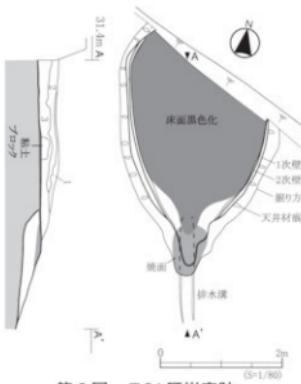
- ・ 半地下式の窯で、幅約2.2m、奥行4m以上の柄鏡形を呈する。煙道部分は調査区外にある。
- ・ 炭化室は幅約2.2m、奥行3m以上の楕円形を呈し、地山床で、奥壁に向けてわずかに傾斜する。床面は黒色化している。
- ・ 壁は粘土を貼って構築され、ほぼ直立し、残りの良い部分で高さ約0.4mある。1度使用した後に内側に粘土を貼り直してもう1度使用しており、厚さは0.2～0.3mで、赤く硬化している。
- ・ 窯上面には天井に架け渡した材の痕跡が0.2～0.5m間隔で見られる。また、堆積土3層には天井から崩落した赤褐色粘土塊が多く含まれ、ワラの痕跡が顕著なことから（写真5）、ワラで天井を

- 覆った上に粘土をかぶせてつき固めたと考えられる。
- 堆積土1.2層は天井崩落後に流入したもので、地山ブロック・炭・焼土粒が多く含む。
 - 焚口部分の構造は明確でないが、幅0.6m×奥行0.8m程度の範囲に焼面が見られる。
 - 焚口部→前庭部にかけて幅約0.2m、深さ約0.4mの溝があり、機能時には埋め戻されているため、排水用に一時に掘られたと考えられる。

【参考文献】

- 大衡村教育委員会 1998『梅木遺跡ほか』大衡村文化財調査報告書第2集
 色麻町教育委員会 1993『日の出山窯跡群』色麻町文化財調査報告書第1集
 宮城県教育委員会 1970『日の出山窯跡群』宮城県文化財調査報告書第22集
 宮城県多賀城跡調査研究所 2009『日の出山窯跡群Ⅰ』多賀城周辺遺跡発掘調査
 報告書第34番

村田晃一 1988『宮城県黒川郡大衡窯跡群』東北歴史資料館研究紀要』第14巻



第3図 T 24区炭窯跡

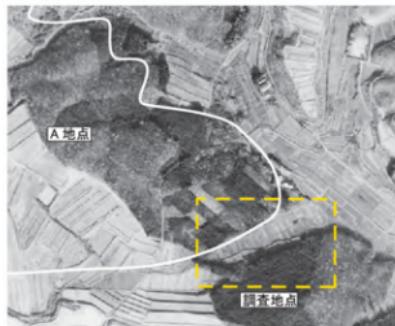


写真1 調査地点空中写真 国土交通省・国土画像情報
 (オキナビセヒヤリ)



写真2 A地点と今回の調査地点（北西から）



写真4 T 24区炭窯跡断面（南西から）



写真3 T 24区炭窯跡完掘（南から）



写真5 T 24区炭窯跡天井材ワラ痕

いしの もり たて あと
石 森 館 跡

調査要項

遺跡名：石森館跡（宮城県遺跡地名表登載番号：54001）

所在地：登米市中田町石森字前田地区

調査原因：県道石森永井線改良工事

調査主体：宮城県教育委員会

調査協力：登米市教育委員会

宮城県東部土木事務所道路課

調査担当：宮城県教育庁文化財保護課

天野順陽 佐藤貴志 久保井裕之

登米市教育委員会 小野寺智哉

調査期間：平成21年7月2日・8日

調査対象面積：112m²

調査面積：108m²

I. はじめに

1. 遺跡の概要

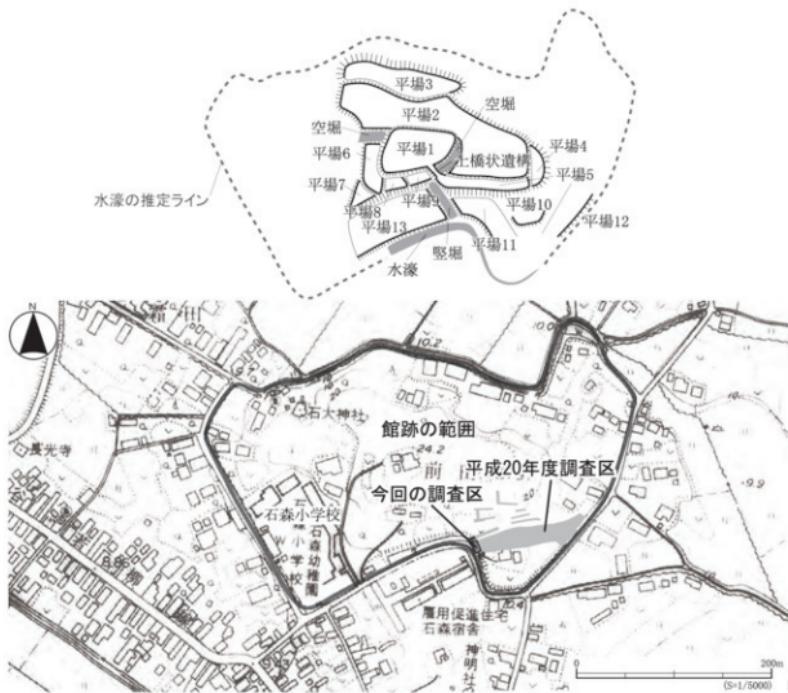
石森館跡は、登米市中田町石森字前田に所在する（第1図、第2図）。登米市中田町は迫低地の北端にあたり、地形は自然堤防や低丘陵が散在しているほかは、起伏の少ない標高8～10mの平坦地である。本館跡は中田町北西部の石森地区にあり、石森小学校東側の石森館山に立地する。周辺には二ッ木貝塚（第1図9）や石森遺跡（7）などの縄文時代の遺跡や、白地横穴墓群（12）などの古墳時代の遺跡、中世では二ッ木（双樹）館跡（10）や小塚館跡（13）、十二神山遺跡（5）、大塙遺跡（6）などがある。

本館跡の記録は、平泉藤原氏時代に藤原氏家臣の猪塚修理清明が居住したと『石森村明治風土記』に記されているのが最初である。中世に入り葛西氏家臣の右近将監康次が、当館に換て石森氏と称した。近世になると伊達氏の支配下に置かれ、寛永二年（1644）家臣の笠原出雲盛康が石森を知行することになった。（中田町史編さん委員会2005）。

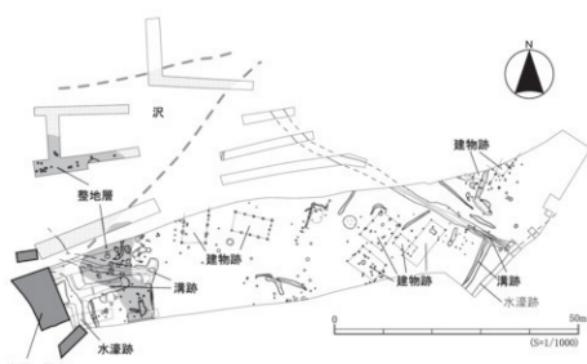
本館跡は小丘陵全体が館跡となっている。遺跡の範囲は、西側が石森小学校建築時に大きく削平されているものの現存する水濠や用水路から推測すると、東西約450m×南北約300mに及ぶ。現在はわずかな山林（杉林・竹林）以外ほとんどが宅地・畠地などで、大きく後世の改変が加えられている。その一方で、丘陵の南には幅7～8mの水濠が存在し、東側で「ㄣ」状に折れ、丘陵南東部の張り出しに沿って幅を狭めながら約200m延びており、往時の面影をうかがい知ることができる。本館跡の構造としては、周囲に水濠を巡らせ、丘陵頂部の主郭を中心に大小複数の平場で構成される連郭式と言える。



第1図 石森館跡と周辺の遺跡



第2図 調査区の位置と石森館跡の模式図



(宮城県教育委員会 2009『石森館跡』宮城県文化財調査報告書第220集より一部加工して転載)

第3図 平成 20 年度調査区全図

2. 調査に至る経緯

県道石森永井線道路改良事業に先立ち、平成 20 年度に宮城県教育委員会が調査主体となって道路建設部分を中心に発掘調査を実施した（宮城県教育委員会 2009）。ただし、計画地西端の水濠部分の調査については、仮設水路を設置し、水を迂回させる必要があったことなどから平成 21 年度の工事に併せて行うこととしていたため、今回、水濠部分の追加調査を実施したものである。

また、水濠を迂回させる仮設水路の布設位置については、ほとんどが平成 20 年度調査区内に収まつたが、現地を再確認したところ、仮設水路の北・南端は道路予定地外を新たに掘削する必要が生じたため、協議の結果、確認調査を行うこととし、水濠部分に先立ち調査を実施した。

なお、道路新設予定地東端と、西端の水濠部分より西側については、当初、道路路盤も改良するため発掘調査が必要とされていたが、平成 21 年度に工事内容を再確認したところ、道路舗装面のみの改良と確認できたことから、当該部の調査は行わないことになった。

以下では、仮設水路部と水濠部分の調査結果等を併せて記述する。

3. 平成 20 年度調査の成果

前回の調査は、道路建設予定地（事前調査）と民有地（確認調査）を対象に、平成 20 年 5 月より約 3 ヶ月にわたり実施された。調査の結果、縄文時代、古代、中・近世の遺構・遺物を検出した。このうち中・近世は、掘立柱建物跡 8 棟、水濠跡 2 条、溝跡（溝状遺構を含む）21 条、井戸跡 5 基、土壙 14 基、整地層 2 カ所の遺構が検出され、西側では平場をつくり出すための造成が認められ、東側では区画溝をもつ中世の屋敷跡の一端が明らかとなった。遺物は中世から近世の陶磁器類、木製品、金属製品、土製品、石製品（金装板碑を含む）、古銭などが出土した（第 3 図）。

4. 調査区と調査方法

今回の調査区は現在の水濠部の屈曲箇所に当たり、地形的には丘陵からの沢が流れ込むところである。前年度の調査では沢部では平場をつくり出すための造成が認められ、丘陵裾部で水濠跡や溝跡が重複して検出された。

①仮設水路部

平成 21 年 7 月 2 日に実施した。仮設水路の大部分は平成 20 年度調査区内に収まつたが、現在の水濠と接続する仮設水路の北端（第 4 図北トレント）と南端（南トレント）は未調査範囲であったため確認調査を行った。

調査は重機で幅約 1.5m、長さ約 2 ~ 3m の範囲を掘り下げ、北トレントでは想定されていた SD1 水濠跡のプラン等を検出することとした。また、南トレントでは、平成 20 年度の調査の結果、SD1 水濠跡の下層には SX53b 溝状遺構があることがわかっていたため、SD1 水濠跡の堆積土を除去し、SX53b 溝状遺構の延長および SD1 水濠跡との関係等を再確認することとした。

②SD1 水濠部

平成 21 年 7 月 8 日に実施した。調査対象は道路幅の約 15m であるが、南辺については崩落の危険

があったため約2m残し、約13m幅で調査した（第4図中央トレンチ）。

調査は重機で前年度発見したSX53b溝状遺構の検出レベル付近まで掘り下げ、SX53b溝状遺構の平面プランを検出し、SD1水濠跡との関係等を再確認した。その結果、SX53b溝状遺構が西側に延び、SD1水濠跡と一連であることが明らかになったが、湧水等の影響で完掘するのは困難であったため、調査区北辺の平成12年度に試掘した場所を掘り下げ、SD1水濠跡の深さや堆積状況等を確認した。

検出した遺構は、平面図は前年度作成した図面に付け加える形で縮尺1/20で作成した。断面図は調査区北辺の断面図を縮尺1/20で作成した。また、デジタルカメラによる撮影を併せて行った。

II. 調査成果

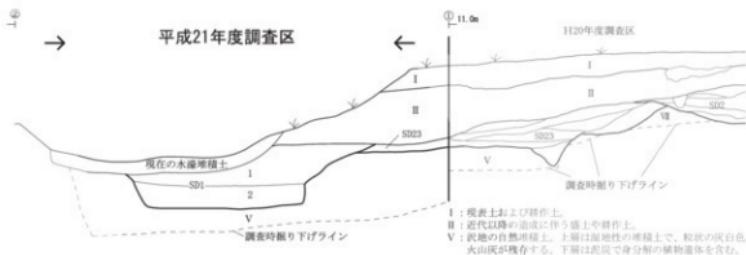
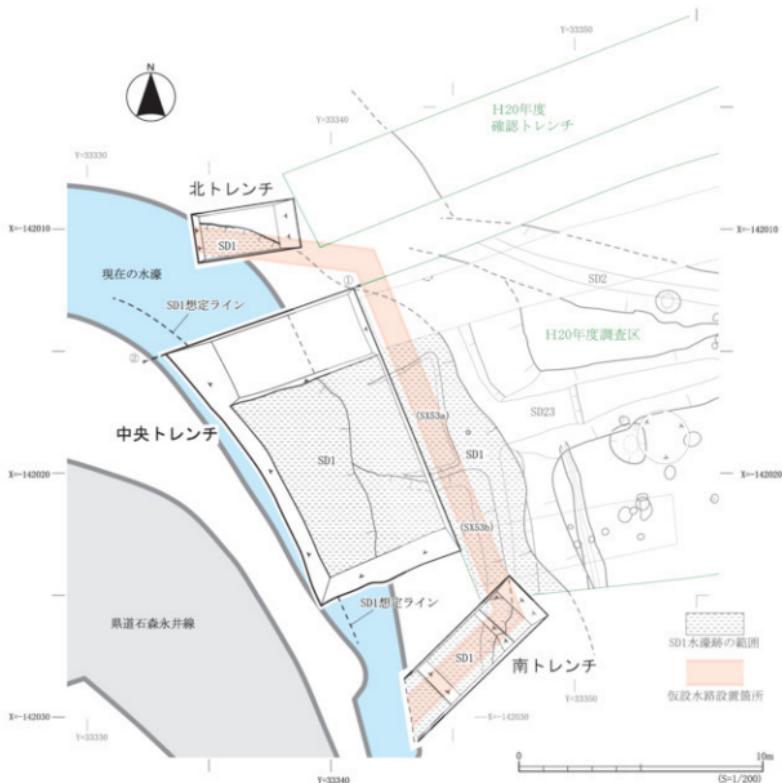
今回、昨年度発見されたSD1水濠跡、SX53b溝状遺構、SD23溝跡の延長を新たに確認した（第4図）。

【SD1水濠跡】 北トレンチでSD1水濠跡が西に曲がることが確認され、これにより現在の水濠とはほぼ同じ位置であることがわかった。SD23溝跡より新しい。また、後述するSX53a・b溝状遺構と一連であることが明らかになった。

昨年度の調査結果とあわせると、検出レベルの違いはあるが、上幅の最も広い部分は中央トレンチ中程で約8.9m、狭い部分は中央トレンチ北辺で約5.1mである。断面形は、底面はほぼ平坦で、壁は底面付近がほぼ直角に、上部は開きながら立ち上がる。深さは中央トレンチ北辺で約1.3mであるが、昨年度の検出面からは約2.5mである。堆積土は2層に細分され、1は灰黄褐色粘質土、2はオリーブ黒色粘質土で、いずれも自然堆積である（第4図）。遺物は出土していない。

【SX53a・b溝状遺構】 昨年度の調査で、SX53a・bともSD1水濠跡より古い溝状遺構と報告されていたものである。今回、中央トレンチで再検出したところ、SX53bはSD1水濠跡とほぼ直交するように接続し、堆積土もきわめて似ていることから、SX53bとSD1水濠跡は一連の遺構であり、状況からSX53bはSD1水濠跡の壁がえぐれるなどした窪み状のものとみている。なお、SX53bについては南トレンチでさらに南に延びていることも確認している。また、SX53aについては、残りが悪くSD1水濠跡との関係はつかめなかったが、SX53bと検出状況が類似していることから、同様のものとみられ、SX53a・bとも昨年度の見解を改める。SX53bの深さは、完掘していないため不明であるが、一部で検出面より約10cm低いところで底面が見えていることから浅いとみられ、やや西に傾斜しながらSD1水濠跡に接続していると思われる。遺物は出土していない。

【SD23溝跡】 前回の調査で、南北方向と東西方向の溝が調査区西端で交わる「T」状の溝とされた。中央トレンチ北壁で断面のみ確認し、SD1水濠跡より古いことを再確認した。また、幅は6.4m以上であることがわかった。遺物は出土していない。



解説	土色	土性	備考
SD1 1 10YR4/2	灰黃褐色	粘土質シルト	炭化物粒・小礫・地山小ブロック含む。
SD1 2 7.5Y3/2	オリーブ黒色	粘土質シルト	地山ブロック少量含む。
SD23 25Y4/1	黃灰色	粘土質シルト	地山粒若干含む。比較的均質。

第4図 調査区の平面図・断面図

【表土出土遺物】 南トレンチの表土から陶磁器が出土している。図示できるものは3点ある（第5図1~3）。

1は磁器の輪花皿である。口縁から底部の一部が残存していて、高台が付き、内面は染め付けで外面に白濁釉が施されている。口縁が16角形で下部に向かって徐々に角度を失い、底部は円形を呈している。法量は口径14.4cm、底径7.6cm、器高4.2cmである。全体的に発色が悪く黒ずんでいる。年代・産地は断言できないが、19世紀中頃の切込産の可能性がある。

2は磁器の壺瓶利である。頸部から底部にかけて残存している。底径は7.6cm。外面に山水文の染め付けが施されている。幕末から明治初め頃の平清水産とみられる。

3は陶器の土瓶である。口縁から体下部にかけて残存している。口径は9.1cm。口縁部に蓋の受け口がある。耳は粘土紐を山形にして両端を指で押しつぶしたものである（「より山」）。外面に山水文の染め付けが施されている。幕末から明治初め頃の大堀相馬産とみられる。



No.	種別	器種	出土地点	残存	口径	底径	器高	産地	時期	備考	写真
1	磁器	輪花皿	南トレンチ表土	口縁～底部（一部）	14.4cm	7.6cm	4.2cm	切込？	19世紀中頃？	内面に染付、透明釉と白濁釉。	1
2	磁器	壺瓶利	＊	頸部～底部	7.6cm	(24.3cm)	平清水	幕末～明治初	山水文。		2
3	陶器	土瓶	＊	口縁～体下部	9.1cm	(10.7cm)	大堀相馬	幕末～明治初	山水文。		3

第5図 出土遺物

【引用・参考文献】

- 東北大大学埋蔵文化財調査委員会 1985 「東北大大学埋蔵文化財年報1」
- 関根達人 1998 「相馬藩における近代窯業生産の展開」『東北大大学埋蔵文化財年報10』
- 仙台市教育委員会 1995 「北目城跡」仙台市文化財調査報告書第197集
- 仙台市教育委員会 2007 「川内A遺跡」仙台市文化財報告書第312集
- 中田町史編さん委員会 2005 「中田町史改訂版」
- 宮城県教育委員会 2009 「石森館跡」宮城県文化財調査報告書第220集



調査地点遠景（平成 20 年 7 月 31 日撮影）



中央トレンチ 北壁断面（南から）



南トレンチ SD1 水濠跡完掘状況（北東から）



北トレンチ SD1 水濠跡検出状況（南東から）



1



2



3

南トレンチ表土出土遺物

- 1 切込産？ 輪花皿
- 2 平清水産 棚德利
- 3 大堀相馬産 土瓶

0 10m
(S=1/3)

いち かわ ばし
市川橋遺跡

調査要項

遺跡名：市川橋遺跡（宮城県遺跡地名表登載番号：18008）

所在地：宮城県多賀城市市川

調査原因：都市計画道路玉川岩切線の新市川橋建設に係わる砂押川左岸護岸工事に伴う

確認調査、工事立会

調査主体：宮城県教育委員会

調査担当：宮城県教育庁文化財保護課

　　村田晃一 生田和宏 初鹿野博之

調査期間：平成21年3月2日～3月3日、3月10日～3月13日

調査対象面積：約140m²

発掘調査面積：69m²

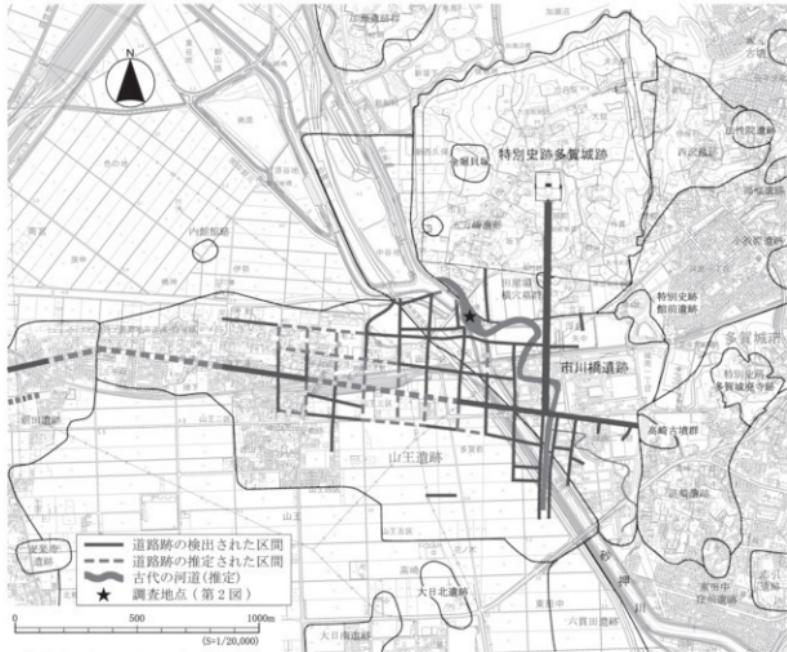
1. 遺跡の概要

この報告は、平成 21 年に実施した、都市計画道路玉川岩切線の新市川橋建設に係わる砂押川左岸護岸工事に伴う市川橋遺跡の確認調査、並びに周辺の河床や中洲で表採された遺物の調査成果である。

市川橋遺跡は、多賀城市の北西部に所在する特別史跡多賀城跡の南～南西部に位置し、東西約 1.4km、南北約 1.6km にも及ぶ広大な遺跡である。遺跡は縄文時代から中世まで長期間にわたって断続的に営まれているが、特に古代においては陸奥国府・多賀城跡と密接な関係を持ち、西側に隣接する山王遺跡とともに、多賀城の城外に方格地割に基づいた街並みを形成していた区域であったことが明らかになっている（宮城県教委 1995、多賀城市教委 1999）。

地形的に見ると、遺跡は仙台平野の北端部に位置し、東側には陸前丘陵から派生する緩やかな起伏を持つ多賀城台地が広がる。台地の南西端に多賀城跡があり、西～南側には砂押川が南流して低平な沖積地が広がっている。市川橋遺跡は丘陵地から沖積地へ移行する標高 2～3 m の低地上に立地する。

今回調査した砂押川では、昭和 35 年から行われた河川改修工事の際に、川底から人面墨書き土器を含む多量の遺物が発見された（多賀城市史編纂委員会 1991）。また、平成 19 年には新市川橋建設に伴う橋脚・橋台部分の調査（第 2 図 C1～C3 区）が行われ、左岸の C3 区で古墳時代と平安時代の河川跡などが検出され、後者からは人面墨書き土器を含む多量の遺物が出土している（宮城県教委 2009）。

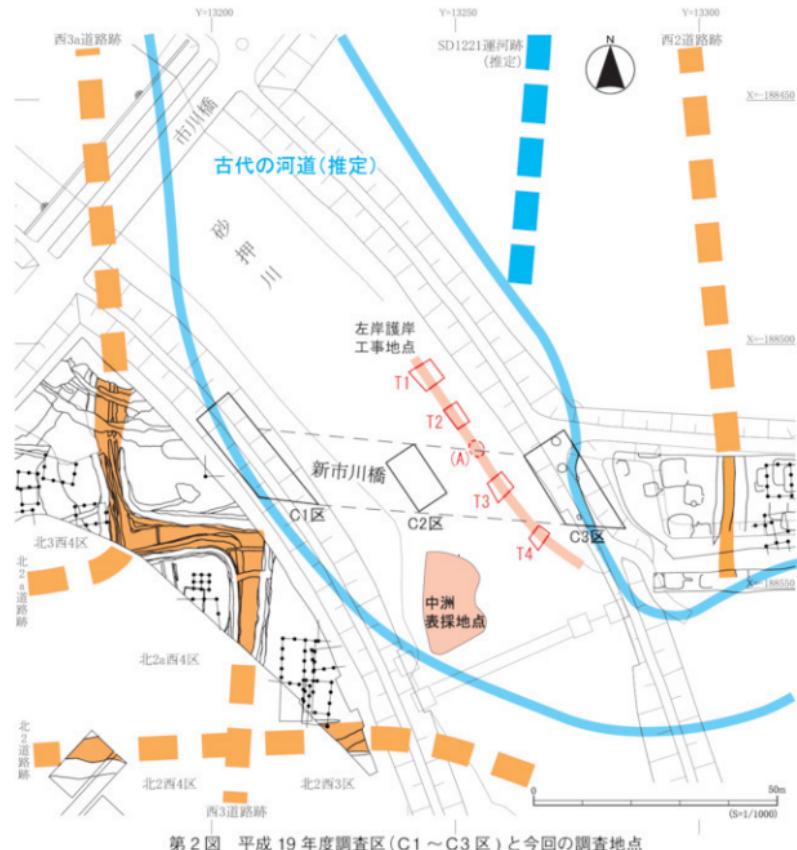


第 1 図 陸奥国府多賀城跡と方格地割、遺跡の分布

2. 調査の経緯と経過

都市計画道路玉川岩切線の新市川橋建設に伴い、平成21年3月に砂押川の護岸工事が行われることになり、市川橋遺跡との係わりについて仙台土木事務所と協議を行った。左岸では基礎のブロックを設置するために、新しい橋の周辺を2m×70mの範囲にわたって、現在の河床から深さ約2mまで掘削する工法になっていた。その場合、平成19年度に実施した左岸橋台部分(C3区)の調査成果(宮城県教委2009)より、掘削が古墳時代の河川跡(SX6721)まで達し、特に平安時代の河川跡(SX6720、現河床から深さ約1mまで)から多量の遺物が出土することが予想された(第3図)。

以上のような経緯から平成21年3月2日と3日に確認調査を実施した。トレーンチ4本(T1～T4、第2図)を設定して深さ約2mまで掘り下げたところ、遺物は出土したもの、C3区の古代の河川に該当するような層は確認されなかった。現代の河川による搅乱で失われたものと判断し、事前調査



第2図 平成19年度調査区(C1～C3区)と今回の調査地点

は行わないことになった。3月10日～13日に掘削工事に立ち会って遺物を回収し、合わせて確認調査を行わなかった範囲の層序も確認した。工事立会の際に出土した遺物は、T1とT2の間を北部、T2とT3の間を中央部、T3以南を南部として回収した。確認調査と工事立会を合わせた遺物量は整理用平箱で約6箱である。なお、右岸の工事は次年度に行われることになった。

確認調査の際に、周辺の河床から墨書き器や完形の土師器壺などの遺物が、整理用平箱1箱表採された。また、平成19年に新市川橋の橋脚部分（C2区）を調査した際に、その南側の中洲（第2図）で表採された遺物が4箱あり、それらも合わせて今年度に整理を行った。

3. 基本層序と出土遺物

（1）基本層序（第3図）

- 各トレンチでは以下の層が確認された。
- I：現在の河床堆積物、厚さ30～40cm
 - II：グライ化した粗砂、厚さ30～90cm
 - III：黒褐色土、厚さ10cm程度
 - IV：グライ化した砂、厚さ70cm以上

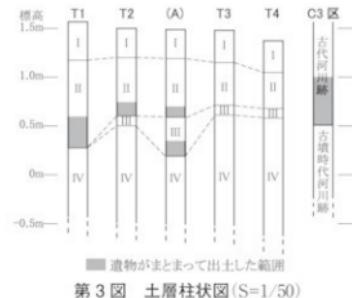
確認調査ではT1とT2のII層下部で遺物が多く出土した。III層とIV層は確認調査で無遺物層と判断したが、工事立会の際にT2とT3の中間地点（A）で、幅3m程度のごく狭い範囲でIII層が厚く（約40cm）堆積し、その下部から遺物がまとめて出土した。T3以南ではII層・III層ともに薄くなり、遺物はほとんど出土しなかった。

（2）出土遺物

遺物はII層・III層から出土しているため、以下、層ごとに記述する。

III層からは土師器・須恵器・石器などが出土した（第4図1～6、写真図版2）。1～3はロクロ土師器の壺で、いずれも底径が口径の半分程度である。1と3は底部に静止糸切りの技法を用いており、2は体部から底部に手持ちヘラケズリを施している。また、2は底外面に墨書き「□」、3は底外面に焼成後線刻「用」が見られる。4はミニチュア土器の壺で、内面に輪積み痕を残している。5は須恵器の壺で、底径が口径の3/4近くある。接地する底部中央付近のみに静止糸切り痕が見られ、底部周縁は無調整である。底外面に墨書き「大石」が見られる。6は砾石で、7面に研磨が認められる。

II層からは、土師器・須恵器・須恵系土器・瓦・石器・獸骨などが出土した（第5図7～17、写真図版2、3）。7は非ロクロ土師器の壺で、7は底部が丸底に近く、8は平底である。ともに内外面にミガキを施しており、7は内外面とも丁寧に磨かれているが、8は外面のミガキが粗いため、手持ちヘラケズリの痕跡が残っている。8の底外面には墨書き「内安」が見られる。9はロクロ土師器の小型壺で、焼成前に体外面に「×」状の沈線がヘラ描きされている。二次焼成の痕跡は見られない。10はロクロ土師器の壺で、叩きの後にロクロで整形している。二次焼成により体上部に多量の炭化物が



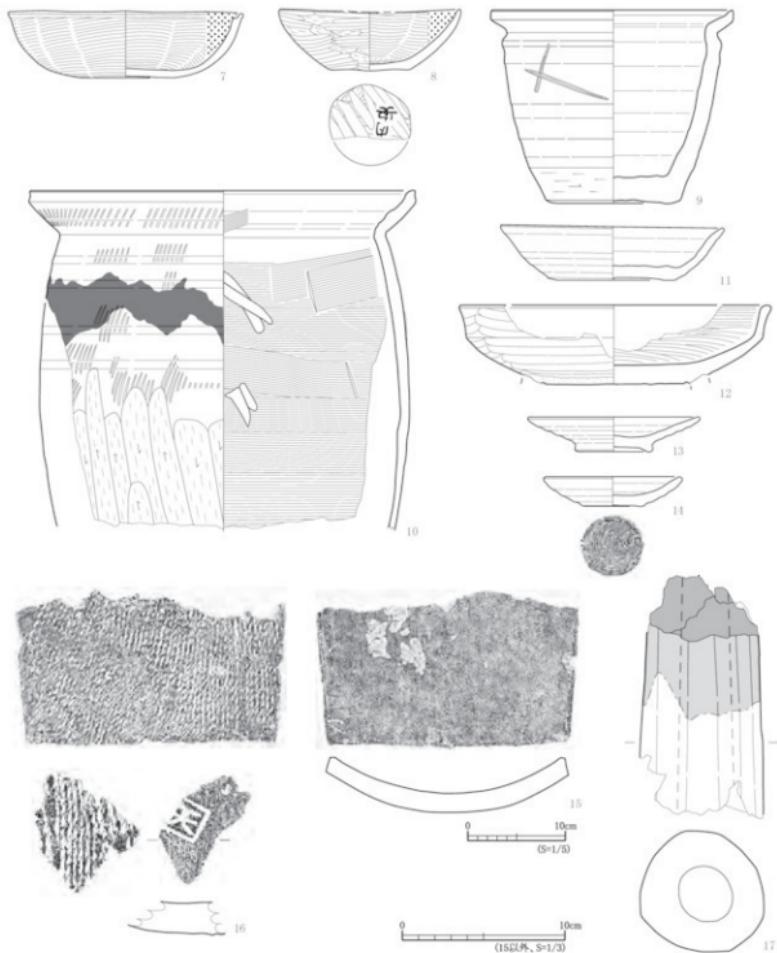
第3図 土層柱状図(S=1/50)

付着している。11は須恵器の坏で、底径は口径の半分程度、底部はヘラ切り無調整である。12はミガキの須恵器の稜塊で、硯に転用されており、内面には墨痕が顯著に見られる（写真図版3）。13.14は須恵系土器の小皿で、13は底部に削り出し高台を持ち、14は回転糸切り無調整である。15.16は平瓦で、15は技法の特徴から多賀城分類による平瓦II B類に位置づけられる（宮多研1982）。16は凹面に刻印が見られ、一部欠損しているが、類例から多賀城分類による「矢」のAタイプと推定され、平瓦II B類に多い（宮多研1982）。17はフイゴの羽口で、先端に鉄の付着が認められる。この他に、凝灰岩切石製の炉壁、ウマの下顎骨や大腿骨（写真図版3）なども出土している。



No.	遺物	地質・層位	残存	特　　徴	登録
1	クロコ上脚器坏	中央・Ⅲ層	完形	口徑13.0、底径7.8cm高さ3.7cm。底部静止角切、内面ミガキ＝黒色処理。船上に海綿骨片含む	902
2	クロコ上脚器坏	中央・Ⅲ層	1/3	口徑15.0、底径7.6～8.2、高さ4.6cm。体ド＝底部手縫ヘラキズリ。内面ミガキ＝黒色処理。底外面墨書き〔□〕	903
3	クロコ上脚器坏	中央・Ⅲ層	1/4	口徑17.6、底径9.0、高さ7.8cm。底部静止角切、内面ミガキ＝黒色処理。底外面焼成後剥離「用」	901
4	ミチュー上脚器	中央・Ⅲ層	完形	口徑5.2～5.6、底径4.1、高さ4.1cm。輪積み、体外面ヘラナギ、体＝底外面に黒斑あり	904
5	須恵器坏	中央・Ⅲ層	3/4	口徑14.8、底径11.0、高さ3.3cm。底部中央付近のみ複施地。底部静止角切。底外面墨書き〔大□〕	905
6	砥石	中央・Ⅲ層	完形	直方体状、12.5×11.7×6.6cm。7面研削。a面上、左、中央、b面左は研削面が風呂状に窪む。a面右は平坦。b面右は粗い研削。a面左下は部分的な小さな研削。輪積炒穴模	907

第4図 左岸Ⅲ層出土遺物



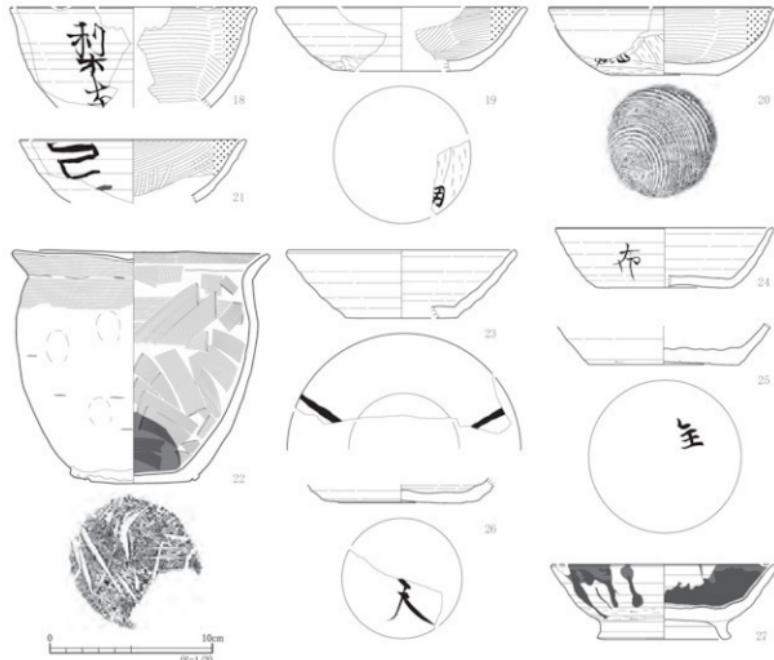
第5図 左岸II層出土遺物

No.	遺物	地点・層位	残存	特徴	登録
7	素面クロコ土器脚环	T 2・Ⅱ層	1/2	D径14.2cm、底径6.0cm、高さ41cm。口縁内面に横溝造らず、内外面兩ヶ所、内面黒色処理。	909
8	素面クロコ土器脚环	北・Ⅱ層	1/2	D径11.2cm、底径5.8cm、外表面一體、底部手持ハラケズリ-ミガキ、内面-ミガキ-黒色処理、底外面墨書き(内安)。	908
9	クロコ土器脚部	中央・Ⅱ層	完形	D径14.8cm、底径8.4cm、高さ11.9cm。体下部斜軸ケズリ、底部耐ナデ、オサニ、体外表面成前ハラ描き「×」。	910
10	クロコ土器茎部	T 1・Ⅱ層	1/4	D径23.6cm、平行3点-ヨロコナデ-体外表面手持ハラケズリ、内面ハラナデ、体外表面炭化物多量着付。	911
11	筒型脚环	中央・Ⅱ層	完形	D径13.7cm、底径7.9cm、高さ34cm。底部ハラ切。	912
12	筒型脚環	中央・Ⅱ層	2/3	D径19.2cm、高台消去、内外面ミガキ、軸規規	914
13	筒型系上部小部	中央・Ⅱ層	完形	D径10.3cm、底径4.8cm、高さ22cm。削り面し高台	916
14	筒型系上部小部	中央・Ⅱ層	完形	D径8.4cm、底径3.8cm、高さ15cm。底部脚軸切。	915
15	平瓦	中央・Ⅱ層	1/2	作り矢、西面-長軸と平行、斜行する網理き目、西面-布目-ナデ、灰色	917
16	平瓦	中央・Ⅱ層	破片	西面-長軸と平行する網理き目、西面-布目、刻印「矢」(勘定)、黒褐色	918
17	タイゴ鉗口	北・Ⅱ層	3/4	残存長14.9cm、帆立貝外径7.5cm、内径3.6cm、先端部外径6.8cm、内径2.4cm。先端部執付着、先端約1/2が被熱で変色。	919

4. 中洲・河床からの表採遺物

平成 19 年と平成 21 年に中洲・河床で表採された遺物には、縄文時代～古代の土器、石器、瓦などがあるが、ここでは墨書き器など特殊な遺物を中心に報告する（第 6 図 18～27、写真図版 4）。

18～21 はロクロ土師器の坏である。18 は体外面に墨書「梨本」（正位）、19 は底外面に墨書「□」、20 は体外面に墨書「日□」（横位）、21 は口縁～体外面に墨書「（不明記号）」が見られる。22 は非ロクロ土師器の小型甕で、体下部～底部の内外面に黒斑があり、二次焼成の痕跡は見られない。23～26 は須恵器の坏である。23 は口縁～体外面に墨書「（縦線 2 条）」、24 は体外面に墨書「布」、25 は底外面に墨書「主」、26 は底外面に墨書「天」が見られる。27 は須恵器の高台坏を漆パレットに用いたもので、内面には漆の皮膜が残り、一部外面にも溢れている。



No.	遺物	地名・層位・現存寸	形	記	参考
18	ロクロ土師器坏	中洲・表採・現存	13枚 15.6cm、内面にガキ・黒色処理、体外面墨書き「梨本」(正位)		704
19	ロクロ土師器坏	中洲・表採・1/4	13枚 15.3cm、底内面墨書き「□」(正位)	体アーチ部子持ハラクズリ、内面にガキ・黒色処理、胎土に海綿骨針多く含む、底外面墨書き	703
20	ロクロ土師器坏	中洲・表採・3/4	13枚 14.0cm、底径 6.8cm、器高 12cm	体アーチ手持ハラクズリ、内面にガキ・黒色処理、体外面墨書き「日□」(横位)	701
21	ロクロ土師器坏	中洲・表採・現存	13枚 13.8cm、内面にガキ・黒色処理、体外面墨書き「（不明記号）」		705
22	非ロクロ土師器甕	河床・表採・完形	1枚 15.5cm、底径 6.8cm、器高 14.2cm、腹壁厚 1.5cm	口縁部墨書きコナデ、体部指ササエ、底部ハラ墨書き沈絞、内面に口縁部墨書きコナデ、全体の内部内面に黒斑あり、胎土に海綿骨針多く含む	922
23	須恵器・坏	中洲・表採・1/3	12枚 14.0cm、底径 6.8cm、体外墨書き「縦線 2 条」		707
24	須恵器・坏	中洲・表採・1/2	11枚 13.4cm、底径 6.4cm、体外墨書き「布」(正位)		706
25	須恵器・坏	河床・表採・現存	9枚 9.4cm、底径 7.4cm、底面ハラ切	体下部に及ぶ、底外墨書き「主」	923
26	須恵器・坏	中洲・表採・現存	7枚 7.4cm、底径 6.4cm、底面ハラ切	底外墨書き「天」	709
27	須恵器・高台坏	中洲・表採・3/4	10枚 13.8cm、底径 8.2cm、器高 16cm、底面ハラ切	体下部墨書きケリ付高台、漆パレット	711

第 6 図 中洲・河床表採遺物

5.まとめ

(1) 遺物の年代と層の性格

今回の調査ではⅡ層とⅢ層から遺物がまとまって出土した。各層の遺物の年代を器形・調整などの特徴から推定すると、Ⅲ層の土師器（第4図1～3）は9世紀前半頃に位置づけられるが、須恵器坏（5）は8世紀中頃～後半にさかのほる可能性が高い。未報告資料も含めて、Ⅲ層の遺物にはおおむね8世紀～9世紀の時間幅が見られる。同様にⅡ層の遺物については、土師器坏（第5図7.8）が8世紀後半頃、土師器甕（10）・須恵器坏（11）が9世紀前半頃と考えられる。また、須恵器の稜塊（12）は多賀城跡五万崎地区SK2272土壤跡（宮多研1994）に類例があり、伴出土器から9世紀前半～中頃に位置づけられている。須恵系土器小皿（13.14）は10世紀までくだるものと考えられる。よって、Ⅲ層・Ⅱ層の遺物とともに、奈良時代～平安時代まで相当な時間幅があり、年代が限定できる資料ではない。

また、遺物はⅢ層からⅡ層にかけて連続的に出土したわけではなく、それぞれ土砂とともに流され、層の下部にたまつたような出土状況だった。Ⅲ層とⅡ層は土の特徴からも明らかに堆積環境が異なるが、一方でⅡ層からⅠ層（現在の河床堆積物）への変化は漸移的で、一連の堆積を見られる。これらのことから、Ⅲ層についてはC3区で検出された平安時代の河川跡の一部の可能性があり、Ⅱ層はそれより新しい時期に、Ⅲ層を削りながら堆積したと考えられる。

(2) 墨書き土器の類例

今回の出土・表採資料には多数の墨書き土器が見られ、陸奥国府・多賀城跡に隣接する当遺跡の性格を強く反映している。ここでは、主な墨書・刻書き土器について周辺遺跡における類例を示しておく。

線刻「用」（第4図3）は、墨書き土器の例が市川橋遺跡SD5021河川跡（宮城県教委2001）などで出土しているが、線刻の例は見られない。墨書「大石」（5）は、多賀城市高崎遺跡出土の須恵器坏の体外面に正位で墨書きされている（多賀城市教委2002）。墨書「内安」（第5図8）は、市川橋遺跡SD5161A河川跡（宮城県教委2001）などに出土例がある。また、線刻の例が市川橋遺跡SD5055河川跡（宮城県教委2001）から2点出土しており、8と同様に内外面にミガキを施した土師器坏の底外面に見られる。墨書「梨本」（第6図18）は、昭和35年の砂押川改修工事の際に出土したロクロ土師器坏の体外面、須恵器坏の底外面に墨書きされている（多賀城市史編纂委員会1991）。墨書「布」（24）は、これまで多賀城周辺では類例が見られないが、山形県米沢市古志田東遺跡ではロクロ土師器の坏、高台坏、須恵系土器の坏に、いずれも体外面に正位で墨書きされている（米沢市教委2001）。墨書「主」（25）、「天」（26）については、これまで市川橋遺跡や隣接する山王遺跡で、多数の類例が認められる。

【引用・参考文献】

- 青森県史編さん古代部会 2008 「青森県史 資料編 古代2 出土文字資料」
- 多賀城市教育委員会 1999 「市川橋遺跡—第23・24次調査報告書一」 多賀城市文化財調査報告書第55集
- 多賀城市教育委員会 2002 「高崎遺跡」 多賀城市文化財調査報告書第65集
- 多賀城市史編纂委員会 1991 「市川橋遺跡」「多賀城市史 第4巻 考古資料」
- 宮城県多賀城跡調査研究所 1982 「多賀城跡 政府跡 本文編」
- 宮城県多賀城跡調査研究所 1994 「宮城県多賀城跡調査研究所年報1994」
- 宮城県教育委員会 1995 「山王遺跡II—多賀前地区遺構編一」 宮城県文化財調査報告書第167集
- 宮城県教育委員会 2001 「市川橋遺跡の調査」 宮城県文化財調査報告書第184集
- 宮城県教育委員会 2009 「市川橋遺跡の調査 伏石・八幡地区」 宮城県文化財調査報告書第218集
- 米沢市教育委員会 2001 「古志田東遺跡」 米沢市埋蔵文化財調査報告書第73集



左岸護岸工事地点遠景
(北から)

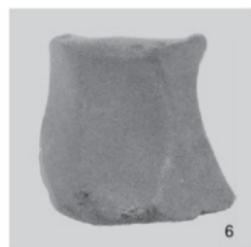
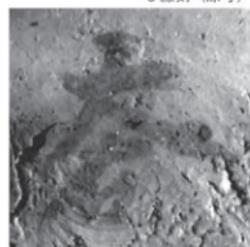


確認調査の状況
(T4区、東から)



工事立会の状況
(南から)

写真図版1

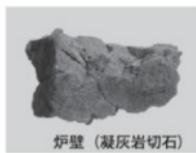
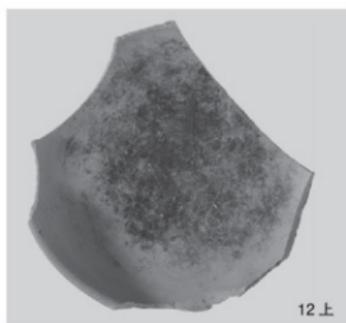


1 ~ 6 : III層出土 (第4図)

7 ~ 10 : II層出土 (第5図)

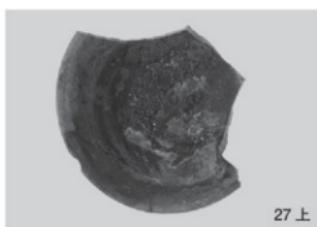
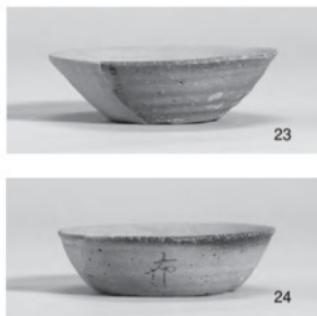
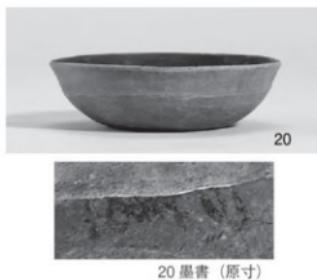
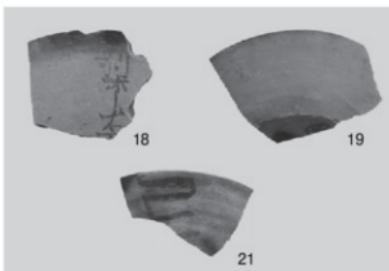
縮尺は明記したもの以外は 1/3

写真図版 2



すべてⅡ層出土、縮尺は明記したもの以外は1/3

写真図版 3



すべて中洲・河床表採品
縮尺は明記したもの以外は 1/3

報告書抄録

ふりがな	だんのこしいせき・はやかぜいせきほか													
書名	壇の越遺跡・早風遺跡ほか													
副書名														
卷次														
シリーズ名	宮城県文化財調査報告書													
シリーズ番号	第225集													
著者名	天野順陽・初鹿野博之・久保井裕之													
編集機関	宮城県教育委員会													
所在地	〒980-8423 宮城県仙台市青葉区本町3-8-1 TEL 022-211-3685													
発行年月日	西暦2010年3月26日													
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		世界測地系		調査期間	調査面積 (対象面積)	調査原因						
		市町村	遺跡番号	北緯	東経									
壇の越遺跡	加美郡加美町 鳥嶋・鳥屋ヶ崎	044458	30039	38度 35分 45秒	140度 48分 01秒	2009.11.02 ～11.19	170m ² (1260m ²)	重要遺跡範囲確認						
早風遺跡	加美郡加美町 鳥屋ヶ崎	044458	30036	38度 35分 41秒	140度 48分 36秒	2009.11.02 ～11.19	75m ² (310m ²)	重要遺跡範囲確認						
日の出山窯跡群	加美郡色麻町 四瀬・黒川郡 大衡村駒場	044440- 044245	31003	38度 30分 47秒	140度 53分 16秒	2009.06.01 ～06.12	1550m ² (25000m ²)	溜池造成工事に伴う確認調査						
石森館跡	登米市中田町 石森・前田	042129	54001	38度 43分 22秒	141度 12分 50秒	2009.07.02 ～07.08	108m ² (112m ²)	貼道改良工事に伴う事前調査						
市川橋遺跡	多賀城市市川	042099	18008	38度 18分 14秒	140度 58分 50秒	2009.03.02～03 2009.03.11～13	69m ² (140m ²)	砂押川護岸工事に伴う確認調査・工事立会						
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項							
壇の越遺跡	官衙関連遺跡 集落跡	奈良・平安		溝跡		土師器・須恵器	東山官衙道路南側で南北大路西側溝を確認							
早風遺跡	集落跡 官衙関連遺跡	奈良・平安												
日の出山窯跡群	窯跡	奈良												
石森館跡	城館	中世・近世		埴跡		近世陶磁器								
市川橋遺跡	集落跡 官衙関連遺跡	弥生・古墳・奈良・ 平安	河川跡？			土師器・須恵器・瓦								
要約	壇の越遺跡 133区・134区では南北方向の溝跡が検出され、位置的に南北大路の西側溝と考えられる。東山官衙遺跡のすぐ南側まで南北大路の存在が確認された。周辺で関連する遺構は検出されなかった。													
	135区では南北方向の溝跡が検出され、位置的にこれまで未確認だった「西2道路（南2道路以北）」の東側溝の可能性があるが、残存状況が悪く断定できなかった。													
	早風遺跡では、壇の越遺跡の東西大路の東側延長線と、外郭区画施設の南側延長との接続部付近で調査を行ったが、いずれも確認できなかった。これらの遺構の有無や位置などについては、周辺の調査を待って判断する必要がある。													
	日の出山窯跡群では、国史跡A地点の約400m南東側の丘陵を調査したが、関連する遺構・遺物は確認されなかった。なお、近現代の炭窯跡が1基検出された。													
石森館跡では、昨年度の調査で検出された水濠跡の広がりを調査し、遺構範囲が現水濠に収まることを確認した。また、前回調査で下層遺構とされたものが、水濠跡の一部であるとわかった。														
市川橋遺跡では、古代の河川跡の可能性がある層が部分的に検出された。それより新しい堆積層も含めて、墨書き土器などの遺物が多量に出土した。														

宮城県文化財調査報告書第 225 集

**壇の越遺跡
早風遺跡 ほか**

平成 22 年 3 月 19 日印刷

平成 22 年 3 月 26 日発行

発 行 宮 城 県 教 育 委 員 会
仙台市青葉区本町三丁目8番1号

印 刷 有 限 会 社 中 村 印 刷
宮城県加美郡加美町字一本杉 215
